セカンド・コンファメイション！

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セカンド・コンファメイション！

【Ｎコード】
Ｎ１５６５Ｏ

【作者名】
蒲公英

【あらすじ】
合コンで持ち帰られた相手は、高校時代の彼氏。
もう一度、友達をはじめるのは悪くないか。
ものっすごくベタなラブコメです。

side ／ユイ（1）

合コンで「お持ち帰り」された。
気持ち悪い・・・それで、目が覚めた。ココはドコ？
部屋をぐるっと見まわした後、ユイは酔いの残った頭を抱えた。
あぁっ！こんなヤツと何したの、あたし！
隣でまだ狭そうに縮こまって寝ているのは、高校生の頃の彼氏だった。

はっきり言って、まったく覚えてない。
服に乱れはないから、そのまま寝入ってしまっただけかもしれないが、コトが終わったあと帰るつもりで自分で着たのかも知れない。
スキニーのジーンズなので、意識不明の女に他人が穿かせるのは不可能だ。
だいたいが、なぜその部屋にいるのかさえ、ユイは記憶していない。

合コンの席に、ハタノがいたのはまったく偶然だった。
会社の同僚が主催で、同僚のカレが勤める会社との親睦会の名目だった。
「お前、なんでこんなところにいるんだよ！」はご挨拶だが
「なんで今更あんたと合コンしなきゃならないのよ！」と答えたユイも大層なものだ。
知り合いならば、と隣同士で座らされ、お互い横を向きながらもお目当ての相手を物色するにははばかられ、イタズラに酒だけを呑み続けた。

――そこまでは覚えているのだが。
ユイは呆然と、寝ているハタノの背中を見ている。
そういえば、あたし、なんでこいつと別れたんだっけ。

なんだか、癪に障った記憶だけがあって、その原因は覚えてない。
あたしが一方的に怒ってた気がする。何だっけ？
あたし、そもそも瞬間湯沸かし器だし。

小さく伸びをして、ハタノが薄く目を開けた。
「おはよ。気持ち悪くない？」そう言いながら胡坐をかき、枕元にある胃腸薬をユイに放った。
「とりあえず、出すもの全部出したみたいだけどな。飲んどけ」
そうだ、ハタノは気が回るヤツだった、とユイはすこし懐かしく思い返して・・・
「え？あたし、吐いたー？」
ハタノは呆れたように苦笑した。
「覚えてないのか？そりゃそうか。居酒屋の階段で動けなくなって、知り合いならつれて帰れって押し付けられて、タクシーに乗せれば行き先言う前に寝やがって、あげく、タクシーの中で吐くし」
ユイの顔はどんどん下を向いてゆき、トドメのようにハタノの声は続いた。
「俺のスーツに肩からぶちまけやがった。」

ゴメン、と身の置き所もなく小さくなったユイに
「ま、やっちゃったことはしょうがないけどな。スーツのクリーニング代は請求してやる」
と、ハタノは肩を小さくゆすった。

「高校生の頃と変わんないな。強情で威勢がいいくせにすぐへコむ。」
ハタノは普通に淡々と何年の前もの話をしていたが、ユイの覚えていないことまでよくもまあ、覚えているものだと感心する。
「とりあえず、薬が効いて胃が楽になるまでもう一回寝とけ」
布団に押し込まれながら、ユイは思い出した。

別れた原因は子どもっぽくて、だけど強い嫉妬だった。
そうだ、原因はあたしだった。

ひとつ、確かめておきたいことがあった。少なくとも、ユイのほうは。
「ゆうべ、あたし、やった？」と単刀直入であまりに直截的な質問に、ハタノは一瞬何を？と迷う顔になった。
「吐きまくって正体不明のヤツと何かしようなんて思うか、バカ！タクシーの迷惑料も返せ！」
赤くなった顔が、まるで高校生の時と同じで、ユイは笑い出した。
「バカが人の顔見て笑うな！迷惑かけた上で疑うな！おまえ、何様だ？」
こんなにムキになるヤツだったっけ。
「つまんないこと考える前に、とっとと寝て、とっとと帰れバカ！」
額まで布団を持ち上げながら、もう一度高校生に戻ってハタノと新しく友達になれたらいいな、と考えてユイは眠りにおちた。

side　／ハタノ（1）

軽快な着信音が鳴って、メールが届いた。
―7時に飯田橋の天狗ね。ユイ。
ご丁寧にハートマークまで入っている。
勝手なヤツ・・・ハタノはこっそり溜息をつき、ケータイを閉じた。

高校卒業以来、6年ぶりにひょんなところでユイに再開して以来、半年が経った。
「幼馴染として」ちょっとずつ交流をするようになり、素でつきあえる数少ない友達になった。
しかし、半年経った今、ハタノはユイのサンドバッグである。
仕事への不満、上司への不満、同僚への不満、女友達への不満。
まるでハタノが不満の相手でもあるかのように、当り散らし、クダを巻く。

なんで、あんなのの酒の相手をするのかな、俺。
放っておけば、今まで一人で解決してたんじゃないのかな。
居酒屋までの道を歩きながら、ハタノはまた溜息をついた。

ユイは、先に到着していた。もうすでにサワーを一杯飲み終えたらしい。
「お待たせ」と向かい側に座ると「遅い！」と返事が返ってきた。
「残業中にお呼びがかかったって、仕事優先だし」と言いながらメニューを広げると
「仕事よりも友達優先！甲斐のないヤツ！」とふてくされた声が戻った。
「ちょっと待て！まず、メシ食わせろ！話はそれから聞いてやる！」

とりあえず腹が満たされるまで待ったことは評価してやろう、とハタノは思う。
ずっと噛み付きそうな顔をしていても、我慢したのだから。
「で？どうした？」聞いた途端、爆弾が投下された。

「やり逃げされた！」
え？今、とんでもない言葉を聞いたような。聞き返す度胸は、ない。
「先週の合コンで会って、メアド交換して、次の日に会ったの。そんで、その翌日からケータイに着信拒否かけられた」
「なんで、そんなのについてったんだよ」
「ちょっとイケメンだったし、勤め先は（ハタノの会社より5倍は大きい企業だ）だし、あたしのこと、すっごくタイプだって言ったし！」
そりゃあ、下心があれば優しくするだろうなぁ。ハタノは天井を仰いだ。

「最初から一晩だけって言えば、あたしだってのこのこついてかない！悔しい！」
いや、一晩だけなんて言ったら、ついて来ないからこそだろ、とは思うが言えない。
「あたしのこと、可愛い、タイプだ、って合コンの時から言ってたのに！」

「おまえさぁ、そいつの目の前で、ネコ何枚被ってた？」
ユイは、そこそこ可愛い。そして、女の子らしく見える。見えるだけかもしれないが。
「なによ！男の前でネコ被らない女なんていないわよ！」

「おまえ、俺の性別忘れてない？」
「種別的には、男。だけど、今はあたしの保護者」

「俺はおまえを生んだ記憶はない！こんなバカを育てた記憶もない！」
ユイは一瞬黙った後に言い返した。
「だって、ハタノになら地金がバレてるから今更ネコ被んなくていいし！」
「いや、たまには被れ！そして暴露話はオブラートぐらい使え！」
「うわ！生意気！ハタノのくせに！」
「バカの話を毎度聞いてるこっちの身にもなれ！バカ！」
「そのバカの話を毎度聞きに出てくるんじゃないの！バカ！」
酔っ払いの話に限りは、ない。

ラストオーダーまで粘り、結局歩くことも儘ならなくなったユイをタクシーに蹴りこみながら、行き先を告げる。
また、寝オチか。
実は、すごく傷ついてたりするのかな。
ハタノは考えながら、少し保護者の気分でユイを見た。

side ／ユイ（2）

もう、一ヶ月くらいになる？
ひとりの部屋でビールのプルタブを引きながら、ユイは小首をかしげた。
―すごいトラブル発生中で、当分遊べそうもない。
ハタノからのメールはそれっきりで、後の連絡は来ていない。
ユイから何度か送ったメールは、戻ってきていないのだから届いているのだろう。
すごいトラブルって仕事だろうな、と予測はつくけれども、何があったのかは皆目わからないし、知りようもない。
ハタノの職場は大手ゼネコン下請けの建設会社だから、建物の仕様が大幅変更になったくらいだろうか。
それにしても、一ヶ月休みナシなわけ？
メールの返事くらいはできるだろうに。

それとも、とユイの懸念が結論を導き出そうとする頭を無理矢理引き戻す。
ユイからの呼び出しを、ハタノが嫌がったことはない。
それどころか、新しい居酒屋を開拓したなんて誘いをかけてくることすらある。

でも、最近のあたしって、ハタノに八つ当たりしっぱなしじゃなかった？
ちゃんと言い返してくるから気がつかなかったけど、あたしの愚痴を聞かせてばっかりじゃない？
ビールを握った手に思わず力が入り、缶はぐにゃりとゆがんだ。
友達って、こんなに一方通行でいいんだっけ。
あたしは、ハタノの愚痴なんか聞いたこと、ない。

ふいに、ユイのケータイの着信音が鳴った。メールではなく、電話だ。
表示されている発信者は「ハタノ」である。
びっくりして、慌てて受信操作をする。
「どうしてたのよ！」
思わずケンカ口調になるのは、頭の中を覗かれたようなタイミングだったからだ。
「あー・・・施主の意向がまるまる変わってさ。一ヶ月、ほぼ睡眠三時間コース休みナシ」
「終わったの？」
「昨日終わって、今日一日寝てた。ユイからメールいっぱい来てたからさ、電話した」
「忙しかったのに、ごめん」
そういうと、受話器の向こうで少し驚いたような気配があった。

「気持ち悪っ！おまえ、熱でもある？」
「なに、それ！ヒトがたまに殊勝な態度とろうってのに！」
「自分で殊勝とか言うな！バカ！」
結局いつものやりとりになり、近いうちにまた呑もう、と話が終わった。

懸念が晴れて、ユイは出さなくて良かった言葉に心底安心した。
本当はあたしと遊ぶの、もうイヤなんじゃない？

side ／ハタノ（2）

実は、照れてしまったのだ。
とんでもなくハードな仕事が一段落ついて、丸一日眠りこけた後ハタノがユイに電話をかけたのは、威勢の良いおしゃべりが聞きたかったからだ。
営業スマイルと怒鳴り声と緊張続きの打ち合わせですっかりヘタっていたので、気分転換には仕事とまったく関係なく気の置けない、できれば女の子の声。
ぴったりなのが何本もメールを寄越してるじゃないかと、そんな理由だったのに
「忙しかったのに、ごめん」
そう言われて、なぜかとても照れてしまったのだ。

容姿は確かに悪くないが、ハタノから見たユイは「女要素」に欠ける気がする。
高校生の頃に何ヶ月か付き合ったことはあるが
キスどまりでそれ以上に色っぽい展開にはならなかった。
再会してから会うのは常に酒を呑む場で、寝オチしたユイを運ぶことも少なくない。
正体不明になった女をどうこうってのは流儀に反する。
それをしちゃう奴の気持ちがわからないわけではないが、ユイを「そうしたい」とは思えず、それはとりもなおさずユイを「女だと思っていない」証拠ではないかと思う。
ユイはユイでハタノを男だと思っていないと思う。
「ハタノと会うのに、気を使ってもしょうがないじゃん」
と悪びれず、化粧ナシのシーンズ姿で現れることも多い。
まして「やり逃げされた！」と叫ぶ奴だぞ、あれ。

ちょっと待て。「やり逃げ」なんだから、他のヤツにはやっぱり女なのか。
少なくとも、ちょっと手を出してみようと思える程度には。
たった一言だけの労いとも言えない労いが、頭のなかにかすかに蘇る。
これって、新しい仕草を覚えた自分の子供を微笑んで見る親みたいなものかな。
自分を「保護者」と表現した顔を思い出し、ハタノは苦笑した。

side ／ユイ（3）

「次の合コン、幹事頼むねっ」
ユイに声をかけてきたのは、カレがハタノと同じ会社に勤めているという同僚だった。
何ヶ月か前に開催した時に、ユイとハタノを除いて大層盛り上がったらしく
―ユイとハタノは何年振りかの再会が合コンだったというあまりのバツの悪さに酒だけを呑み続け、つぶれたユイをハタノが回収した、という経緯の―
また懇親会の名目をとる、ということだ。

何が懇親会？建設会社と医療器具販社に何の繋がりがあるの？
そう突っぱねてしまうには、同僚は不便な存在だ。
角が立たないように、自分の立場が悪くならない程度に断わるのは難しい。
「向こうに、高校の同級生がいるんでしょ。その人と組んでよ。お願い！」
片手拝みの同僚は、ユイの否定顔を無視するように言うと
「参加希望者は、この人数だから」と、明らかに仕事中に回覧しただろうと思われるメモを机の上に置いていった。

あたし、こういうの苦手なんだけどなぁ。
席がどうの、とか二次会の場所とか。気が利かないし。
第一、ハタノが一緒にいたら外面がきかないじゃない。
でも、今まで散々参加してきたし、断れないよなぁ。

ユイは複雑な気分でメールを打った。
―なんだか、二人で幹事やれって言われたんだけど。ユイ。

折り返し、返信が来た。
―俺も今言われた。明日、ヒマあるか？打ち合わせしよう。
ハタノも引き受けたようだった。

翌日待ち合わせた池袋で、「打ち合わせ」と言ったにもかかわらず、ユイはついていただけだった。
いくつかの店をピックアップし、その場で二次会ができるか、近所にカラオケがあるかの確認をし、テキパキとメニューとひとりあたりの予算を提示して店と交渉したのはハタノである。
金曜の晩は予約が面倒だと言いながら、しっかり幹事特権まで取り付けた。
「ねぇ、もしかしたらあたし、来る必要なかったんじゃない？」
ユイがおそるおそる聞くと
「他のヤツを連れてくるんだろ。場所覚えとけ。それくらいの役には立て」と返された。

一息ついた居酒屋でビールを飲みながら、ハタノはおもむろにこう言った。
「当日は一応、オンナノコ扱いするつもりだけど、持ち帰られたりメアド交換したりするなよ」
それって、どういう意味？あたしが他の男と仲良くしたら、不愉快？
そう、口に出す前に先が続いた。
「さすがに俺も知り合いと何かあったら、おまえのフォローできないから」
「ちょっと待て！あたしが振られること前提？」
「他の設定が何かあるのか？」
うっ、と言葉に詰まる。前科があるので、強気に出られないのだ。
しかも、ハタノの知り合いにカレシ募集中でーす、なんて顔はできない。
うまくいってもいかなくても、知っている間柄では気まずいことに

間違いはない。
なんだか、ちっとも楽しそうじゃないんだけど。
保護者同伴の合コン・・・どうなることやら。
ユイが小さく溜息をついたことに、ハタノは気がつかなかった。

side ／ハタノ（3）

「なぁ、おまえの同級生、結構かわいいじゃん」
同僚に声をかけられて、ハタノは改めてそちらに向き直った。
見事なネコの被りようである。
にこやかに話に相槌を打つユイは、まるでしおらしい女の子のようだ。
そして、こともあろうにハタノに呼びかける時は小首をかしげて「ねぇ、ハタノくん」と来た。
うわ！誰だ、おまえ？
いつもの機関銃のような早口とポンポン飛び出す罵詈雑言はどこにしまった？
ハタノは苦い顔でチューハイを飲み込んだ。

ユイに持ち帰られるなだのメアドの交換をするなだのと言ってしまった手前、自分も積極的に女の子との会話に加われなくなってしまった。
こんな合コン、幹事のやり損じゃないか。
次に話が来た時には断固として断わってやる。

「前回話ができなかったから、今日はゆっくり自己紹介してよ」
ユイの座る席の方から、同僚の声がする。
「ハタノと高校が一緒だったんだって？仲良かったの？」
一瞬、ハタノの方に確認するような視線が来たので、小さく×印を出す。
「ハタノくんは、理系クラスで成績良かったからぁ、接点はなかったの。テニス部は一緒なんだけど、あんまり合同練習なかったしぃ」
だからなんなんだよ、その語尾を延ばした喋り方。
気がつくと「目新しくて結構かわいい」ユイは、何人かの男に囲ま

れていた。
そしてハタノはそちらにばかり気が行ってしまい、他の誰かと喋れずにいる。

「時間でーす。二次会に流れる人は、外で少し待っててくださーい」
ユイとハタノが揃ってレジ前に並んで清算し、店の外に出ようとしたときに、ユイは大きく伸びをして呟いた。
「・・・疲れたー」
「でっかいネコ被ってるからじゃないか？」
「たしなみがあるって言ってよ！あたしだって、外聞ってモノがあるのよ！」
「いや、俺は今の今までおまえに、たしなみなんて感じたことないぞ」
「ハタノ相手に、なんでそんなもの感じさせなきゃいけないのよ！」
店を出た瞬間、ユイはまた見事に変身した。

二次会のカラオケで、ユイは困っていた。
ハタノの同僚の一人が、この後二人で抜けない？と囁いたから。
「でもぉ、あたし、今回幹事だし。ハタノくん一人にしたら悪いし」
ユイの助けを求めるような視線に、ハタノは席を移動する。
「ハタノ、おまえの同級生、連絡先も教えてくれないんだぜ」
ずいぶん出来上がっている同僚は、ユイの腕を掴んでいた。
それを見て、軽いショックを受けた自分がいる。
やばい、俺も結構酔ってるかも。

「こいつは、持ち帰り不可。連絡厳禁」
気がついたら、同僚に向かってそう言っていた。
なんだってこんなこと言ってるんだ、俺？
確かにユイ本人には釘を刺してたけど、他人に言うべきことじゃない。

ユイだって、びっくりしてるじゃないか。
なのに、自分の意思とは関係なく言葉だけが飛び出た。
「俺の目の前では、手出し無用」

side ／ユイ（4）

え？ちょっと、何？
この展開だと、あたし、ハタノとつきあってるみたいじゃない。
ひょっとしてハタノ、あたしのことスキ？ありえない！
あんなこともこんなことも全部喋っちゃってるのに。
ってゆうか、当のハタノが固まっちゃってるし。

「ごめんねぇ。ハタノくんはあたしの保護者だからぁ。今度、また機会があったら誘ってぇ」
ユイはとりあえずのフォローを入れて、ハタノを隣に座らせた。
そして、テーブルの下ですばやく脛に蹴りを入れる。
一瞬ハタノの顔は痛みで歪んだが、頭は正常に動き出したようで同僚に向き直る。
「俺、こいつの兄みたいなもんだからさ・・・」
「そうなの、過保護な兄で困ってるの」
同僚はしらけた顔で、席を移動していった。

「おまえ、ちょっと隙だらけじゃない？」
「どういう意味よ、それ？」
「簡単に誘われるなって言ってんだよ！」
「あたしから誘ったんじゃないでしょ！」
もちろん、隣同士のこそこそ声での話である。

「ねぇねぇ、ホントに仲いいよねー。実はつきあってない？」
次に声をかけてきたのは、ユイの同僚だった。
「さっきから、なんだか二人の世界つくってない？」
「つくってない！」
ふたり同時に声が出た。

三次会は流れ解散になり、ユイとハタノは帰り道、また肩を並べて歩いていた。
「電車に乗って帰るの、億劫だなー。ハタノのうち、要町でしょ？泊めてよ」
ユイにしてみたら、寝オチした後に何度も運ばれている部屋だ。他意はない。
にもかかわらず、ハタノはギョッとした表情になった。
「だから隙だらけだって言ってる！おまえだって東武練馬で電車一本だろ、帰れ！」
「えー？だって電車に乗ったら寝ちゃうし。いつも泊めてくれてるじゃん」
「それはおまえがツブれた時だけだろ！」

また、ムキになってる。いいじゃない、今まで何にもなかったんだし。
あれこれ内情バラしちゃってるハタノと、どうこうある訳ないし。
それに、もう歩くの面倒。
「いいじゃない。友達なんだから」
ユイがそう言いかけると、被せるようにハタノは言った。
「手も出せない女を部屋に泊めてどこが楽しい！」

side　／ハタノ（4）

パチンとどこかを叩かれた表情で、ユイはハタノを見つめた。
俺、何か地雷踏んだか？
一瞬うろたえたハタノの顔をすくい上げる角度で見ながらユイは言い放った。
「へぇ？ハタノは楽しいことができれば、女の子を部屋に連れ込むんだ」
ケンカ腰の物言いに、少し怯む。
「楽しいことのできる相手じゃなくて、ご・め・ん・ね！」
論点がズレてる。
俺はそんなこと言ってない・・・筈なんだが。
大体なんで怒ってんだよ、勝手なこと言ったのはそっちだろ。

「泊めてって言ったの取り消し。終電がなくなる前に帰る」
ユイがすたすたと歩き出したので、慌てて隣を歩こうとすると
「あんたは歩いて帰るんでしょ！方向が違うわよ！」と、不機嫌な声が飛んだ。

「何をいきなり怒ってるんだよ！」
ユイの口調につられるように、語気が荒くなった。
おい、俺、やっぱり酔ってないか？頭の中の冷静な部分が自分に問う。
「そんな帰り方されたら、こっちだって寝覚め悪いだろうが！」
ユイは一瞬きょとんとした顔をした後、バツが悪そうに笑った。
「なんだかいつもと立場が逆。ごめん、ハタノは悪くない。あたしが」

言いにくそうに言葉を切ってから、更にバツが悪そうに続いた。
「あたしが、ハタノは生物学的には男だってコト忘れてたの」

「で、今ね、男なんだって思い出したらびっくりして動揺した。悪い！おやすみ！」
早足で駅の方に歩いていくユイを見て、ハタノも逆方向に歩き始める。

バツが悪そうに笑う顔がなんだか可愛かった。
俺も今日、ユイが女だったって思い出した気がする。

side ／ユイ（5）

学生時代の友達と会い、映画を見た後にお茶を飲みながら
ユイはふとハタノとの顛末を話す気になった。
「げっ！信じられない！よくそこまで好き勝手つきあわせたわね！」
途中までの説明で、友達は引き気味に評価した。
「そいつ、すっごいバカ？それともとんでもないお人好し？M？」

言えない。
セクハラ上司に尻掴まれた話とか、やり逃げされた話とか全部聞かせちゃってること。
しかも6年振りに再会した時なんか、ハタノのスーツに。
うわ、あたし、サイテー！

「だって、フツーに友達だし、昔から面倒見のいいヤツだし」
言い訳がましく言って、ケーキにフォークを突き刺すと
「あたしだったら、寝オチ承知で呑み続ける女なんか捨てて帰る」
と、指を突きつけられた。
「しかも、世話やいても何もできないって、メリットないし」
それは、確かに認める。ハタノにメリットはない。

「何にせよ、どっちかに相手ができたら、もう一緒に遊べないじゃない？」
「なんで？」
ユイの質問に、友達は笑った。
「あんただったら、自分の男が他の女と夜通し酒呑んでたらどう思う？フツーはね、酔っ払って泊ったりしたら、こいつら寝ちゃったんだって判断するわけ。カノジョに疑われてまで、酔っ払いの面倒みたりしないし」

ユイの思考停止状態の顔の前で、友達は手をかざした。
「おーい、今まで考えてもなかったって顔してるよ？大丈夫？」

考えてもいなかった。
そうだ、ハタノにだって可愛い彼女ができるかも知れないんだ。
それで、彼女に悪いから遊べないって言われたりして。
いや、ハタノの性格なら絶対彼女を大切にする。不安がらせたりしないはず。
ユイは固まった頭のまま、それを想像しようとした。

そして、それはとても。
「――イヤだ。」
思わず、声に出た。

side ／ハタノ（5）

さて、どうしたもんかな。
ハタノの目の前に置いてある物は、マイナーな劇団のチケット2枚である。

大学の頃の知り合いにバッタリ会って、無理矢理買わされた。
団員のノルマがあるんだ、頼むよ、と泣きつかれて断わりきれなかったのだ。
授業にもほとんど出ずに芝居に打ち込み、いつの間にか退学した知り合いは、びっくりするほど生活感を持たずアルバイトの金も劇団につぎ込んでいるようだった。
俺にはそんな不安定な生活できないな、と思いながら話を合わせていたら、友達だったろう？芝居観に来てくれよ、と手製のリーフレットを持たされていた。

おい、知り合いではあったけど友達だった記憶はないぞ。
そう思いながら財布を出したのは、我ながらちょっと人が良かったかもしれない。
だって俺、芝居になんか興味ないし。

仕方なく家まで持って帰り、リーフレットを読んだ。
会場は池袋か。暇つぶしに行ってやってもいいけど、チケット2枚だしな。
ラブストーリーじゃないか。男と一緒に観て、何が楽しい。
と、したら誘うのはあいつか。

携帯のフラップを開き、メールの文面を打ち込み始めてから首をかしげた。

―来週の土曜日に芝居を観にいかないか。
なんだか彼女をデートに誘ってるみたいだ。
―芝居のチケットを買ったから、一緒に行かないか。
一緒に行くためにわざわざチケットを用意したみたいだ。
適切な文章って思い浮かばないものだ。
面倒くさい。直接話そう。

「はい」
電話を受けた声が、いつもより少し緊張気味に聞こえた。
「あのさ、来週の土曜日、ヒマだったらちょっとつきあわない？」
「どこへ？」
かいつまんで、用件を話す。
「つきあってもいいけど」
と、返事が来たので時間と場所を説明した後、低いテンションが気にかかる。

「なんかヘコんでる？」
「何を？」
「セクハラ上司に今度は乳握られた、とか」
受話器の向こうで一瞬息を飲む気配があった。
「何そのオヤジ発言！それこそセクハラ！あたしが落ち着いて喋ったらおかしい？」
あ、良かった。いつものユイだ。
「いやいや、落ち着いたユイに慣れないもんで。ってゆうか落ち着いてることないじゃん」
「そんなわけあるか！あたしは穏やかな性格って言われてるのに！」
「それは巨大ネコを背負った状態でだろ、俺の前じゃないことは確かだ」
待ち合わせの時間と場所を決め、電話が終わった。

あいつが、あんなに感情的になるのは俺に対してだけだ。
複雑な満足感に、ハタノは少し戸惑っていた。

side ／ユイ（6）

何、着て行こう。
ユイはクローゼットの前で腕を組んだ。
馴染のないところに出かけるときの、お約束の光景である。
ずいぶん前に友達に誘われて行ったことのある小劇場は、椅子ではなく床に座った。
知らずにスカートで出かけたので、芝居の間ずっと足が辛かった。

ハタノの知り合いが出るんだって言ってた。
挨拶なんかされた時、あんまり構わない格好だとハタノに悪いかな。
ダサい女連れてたなんて言われたら、イヤだろうし。
ちょっとだけ、可愛くしていこう。
ジーンズに女の子らしいトップスを選び、ベッドの上に並べてからシャワーに向かう。
ひとりの部屋の気楽さで、バスタオルを巻いたまま下着の引き出しをあけた時に、頭に突拍子もなく浮かんだことがある。

可愛い下着にしとこうかな。

次の瞬間にパニックが訪れた。
ちょっと待て、あたし！今日の待ち合わせがハタノだってわかってる？
そんな展開、ありえないし！
よしんば片方がそうなりたいと思ったって、今更どの面さげて！
と自分に啖呵をきる一方で、意外にリアルに想像してしまい、ユイは部屋の真ん中でひとりで赤面しながら気がついた。
今まで、こんなことは考えもしなかった。

高校生の頃につきあっていたとはいえ、その後のハタノは知らない。面倒見の良さがそのままだったから、学生ノリがこのまま続くと思っていたけれど、もし昔から知ってるヤツじゃなかったら、ハタノってどういう男？

家を出る時間が近い。
グルグルし始めた思考をとりあえず放っておくことにして化粧を済ませ、部屋を出た。
電車の中で、俄に自分を立て直す。
とりあえず仲の良い友達、但し性別男ってことで深く考えないことにしよう。

そして、池袋駅。
待ち合わせはメトロポリタンプラザの前なので、東上線の一番前の出口に向かう。
その時白杖をついた年配の男性が、明らかに不慣れな足取りでユイの前を歩いていた。
改札の出口でタクシー乗り場への道を、駅員に確かめている。
待ち合わせにはまだ、十五分の余裕がある。

ユイは男性の前に回り、声をかけた。
「あたしもそちらの出口に用事がありますから、よろしければタクシー乗り場までご一緒しましょうか？」

side ／ハタノ（6）

ちょっと早いかな、と待ち合わせ場所に向かう途中でハタノは足を止めた。
向かい側から歩いてきたのは、待ち合わせの当の相手だ。
もうひとり、年配の男性が一緒にいるが。
ユイはハタノに気付くこともなく、ゆっくりとした足取りで待ち合わせ場所ではない方に歩いていく。

どこに行く気だ？
そう思って進んだ方向に目を向けると、ユイの右肩に置かれた左手と、白杖が目に入った。
サポートの道案内をしているんだと気がつき、声をかけずにそのまま後ろを歩くことにする。
僅かな段差で「段差があります。一歩下におります」と声をかけている。
へぇ、慣れてるじゃないか。意外かも。

タクシー乗り場まで男性を案内してタクシーに乗せた後
時間を気にして小走りになろうとしているユイに声をかけた。
「もう、ここにいるから戻らなくてもいいよ」
ハタノの顔を認めた瞬間のユイの反応は予測外だった。

顔に朱がのぼるとはこのことだ、と言わんばかりに赤くなり、うろたえた表情をみせる。
「いつから、そこにいたの？」
「駅から出て来た時から、後ろ歩ってた。声、かけたほうが良かった？」
「それは、おじさんが気を使っちゃうから声をかけられないほうが

有難かったかも」
まだ耳まで赤いままだ。
「おまえ、案外と気が使えるいいヤツ・・・」
言いかけると同時に、脛を蹴られた。

もしかして、照れてんのか。
蹴られた脛は痛いが、そうだとしたら文句は言えない。
「いいヤツとか言われたくてサポートしたんじゃないし！手なんか貸せる人が貸すの、アタリマエでしょ！明日の我が身かもしれないし！」
そう思っても、人間ってのはなかなか声なんかかけられないし、サポートの作法なんて知ってる人は少ないと思う。
いつでも手助けできるように準備してるだろ。
今、それを口に出したら、もう一度蹴りが来そうだ。

やっと普通の顔色に戻ったところで、時間は大丈夫かと確認された。
劇場までの道を急いで歩きながら、ハタノは考えていた。

威勢がいいだけで、気が小さいヤツだと思ってたのに。
ユイは俺が知ってるだけのユイじゃないかも知れない。

side ／ ユイ（7）

昼公演が終わって劇場を出ても、外はまだ充分に明るかった。
芝居自体は「ウエスト・サイド物語」を幕末に設定した悲恋もので、マリアにあたる所の役柄が「誰が彼を殺したの！」と叫ぶくだりで感極まりそうになったが、ハタノの前で少しでも女の子のとりそうな行動をしたくない、とユイは妙な自制心をおこした。
だって、ハタノはあたしにそんなこと望んでないもの。

「まだ酒って時間でもないし、コーヒーでも飲もうか」
そう言って歩き出したハタノの横に並びながら、自分の気持ちの不安定さが癪に障る。
いつもと同じなのに。会って一緒にごはん食べて、バカ話して。
―どっちかに相手ができたら、もう一緒に遊べないじゃない？
女友達の軽やかな声が聞こえてきた。
そんなことないって言いたいけど、本当はきっとそうなる。
女友達よりも恋人優先なのは、当然だもの。
ハタノが今まであたしのグチを聞いたり、酒の相手をしてくれたりしていたのは、多分フリーだって理由だから。

カウンターで隣合ってコーヒーを飲みながら、ユイはまだ上の空だった。
「おまえ、今日何かヘンじゃない？」
「そんなこと、ないと思うけど」
ぐっと顔が寄って、掌が額に当てられた。
「具合悪いのとか、黙ってんじゃないのか。熱は？」
「うわ、なにそれ！あたしは子供か？」
思わず顔をのけぞらせて逃げる。自分の顔に血がのぼるのがわかった。

やだ、高校生みたい。今までだってこんなこと、何回もあったのに。しかも相手は、体裁の取り繕いようもないハタノなのに。

表情が作れなくなって下を向いてしまったユイの背を、ハタノが軽く叩いた。

「なんだか調子悪いみたいだから、帰ろうか」

そう言いながら立ち上がるので、ユイも席を立った。

「なんだかわかんないけどさ、言いたいコトは溜めないほうがいいぞ。グチならいつでも聞いてやれるし、元気がいいのが数少ない美徳だし」

「数少ないって失礼な！」

言い返すと、その調子、と笑われた。

そのまま改札まで行き、手を振ると虚脱感がきた。

友達って立場は、居心地が良すぎだ。

side ／ハタノ（7）

翌日、日曜日。
ハタノは携帯電話を見つめていた。
やっぱり、様子がおかしかったよなぁ。
途中から具合が悪くなったのに、無理してたのか？
送ったほうが良かったのか？いやいや、つきあってる訳でもないし。
それとも、なんか不機嫌にさせたか？
いや、それだったら噛み付いてくるはずだし。
だいたい、俺は何を気にしてるんだよ。

タクシー乗り場で振り向いた時の、真っ赤な顔が浮かんだ。
こんなに気になるのは、予想外の顔を見たせいだ。
会わなかった何年かの間、ユイが何をしていたのか知らないのに
ここ数ヶ月で全部把握している気になってた。

なんだか、俺ってすごく迂闊じゃないか？

携帯電話のフラップを開いて、メールを打ち込む。
―気分はどうだ？
我ながら芸のない言葉だと思いながら送信すると、すぐに返信が来た。
―元気だよ♪昨日はヘンだったね。ごめん。

ごめん？ユイが？
やっぱり、どこかおかしい気が。
そして、俺もどこかおかしい気が。
ハタノは自分の神経を自分に集中させ違和感の正体を探る。
しばらくして、うすぼんやりと見えてきたものがある。

ユイが概念として女ってだけじゃなくて、ちゃんとした女の子に見えたんだ。

それで？とハタノは自分に問う。

だからって、今更ユイとのつきあいの方向が変わるか！

自分の出した結論に半ば腹を立てながら、ハタノは更に複雑な顔になった。

side ／ユイ（8）

―ちょっと都合悪い。また今度。ユイ。
携帯電話の送信ボタンを押した後、溜息をついた。
嘘をついたのが後ろめたくもあったが、ほっとしたのも確かだ。

今ハタノと会ったら、また挙動不審になる。
あたしはハタノとどうしたいんだろう。
あたしの八つ当たりを何事もなく流してくれるから？
バカな話で際限なく盛り上がれるから？
酔いつぶれても見捨てられたりしないから？
それだけの理由で、何ヶ月も頻繁に会っていたの？

だって、男だと思ってなかったし。
少なくとも、そうなりたいと思ったことなかったし。
ハタノだってきっと同じで、あたしと何かしようと思ったことはないと思う。
酔ったイキオイですら、今まで何もなかったんだから。

「やり直し！ちょっと頭からこの案件は外すっ！」
杏露酒に氷を入れながら、部屋の中でひとりで声を出した。
「考えても仕方ないことは考えなくてもいいこと！」
頭の中で突き当たってしまった考えなど、曲がる方向が見えるまで放っておくことにしよう。

ファイト！と自分に気合を入れて、ベッドに倒れこむ。
酔って寝てしまえ。

こんな時にこその浅い眠りの中で、いくつか寂しい夢を見たらしい。

内容は皆目覚えていないのだが、夜中に目を覚まして起き上がるとなにやら心細くなった。
午前1時。ハタノはまだきっと、起きている。
ついこの前まで平気で電話してた時間なのに、なんでこんなに重いことになっちゃうんだろう。
関係なんかひとつも変わってないのに。
でも今、ユイの中で自分への問いはひとつ解決した。

あたしは多分、心細い時にハタノに頼りたいんだ。

side ／ハタノ（8）

3回目だぞ。都合悪いって、なんだよ。
じゃ、次はいつにする？なんて話にも持っていってないし。
ハタノははっきりと不機嫌を自覚した。
芝居を一緒に見に行ってから、3週間が経過していた。

俺を避けているのか。何か怒っているのか。
それとも、考えられなくもない――――男？
男ができて、俺と会うと悪いから、とか。
ありえなくない、いや、それが一番可能性が高い。
天下一品のネコ被りだし、合コンで相手みつけちゃうヤツだし。
確認しなくていいのか？
自分から報告してこない以上、俺に言いたくない相手かもしれない。
俺は、それでいいのか？

いいわけ、ないだろ！

携帯電話を操作して、ユイの番号を呼び出す。
「何？」
ケロっとした返事に、気勢をそがれた。
俺って、もしかしたらすごいヘタレなんじゃないか？
「ずっと都合悪いって返事ばっかりだからさ、ちょっと気になって」
出てきた言葉はひどく尻すぼみで、ハタノは自分が情けなくなった。
「うん、ごめん。ちょっと勉強しなくちゃならないこともあったし」
ユイの言葉も妙に歯切れが悪く、ぎこちない沈黙がある。
「勉強って何してるんだ？事務職だろ、簿記かなんか？」
「手話。ビデオ学習だけど、なかなか難しくて」
ひどく言いにくそうな答えが返ってきた。

また、真っ赤になって照れてるんだろうか。
びっくり箱みたいなヤツ。
何故、その勉強をするのかは今度まとめて聞いてみよう。

「でもさ、それって毎日根詰めてる訳じゃないんだろ、出て来いよ」
ちょっと強引な言い分かな、と思いながらそう言うと、意外な返事が返ってきた。
「休みの日の昼間なら、出てく」
つまり休みの日にデートの予定はないわけだ、とハタノは心で小さく息をついた。
「じゃ、日曜日に代々木公園のフリマはどうだ？」
それ行きたい、とユイは同意し約束になった。
言葉の歯切れの悪さは気になるが、会えば元に戻るだろう。

よし、とハタノが小さくつぶやいた意味は、ハタノ自身にもよくわからなかった。

side ／ユイ（9）

朝、待ち合わせに現れたハタノは明らかに疲れていた。
「もしかして、仕事忙しかった？」
「なんだか無茶言う施主でさー、昨日の夜中まで」
「別に無理しなくて良かったのに」
そう言うと、ハタノはユイの頭を軽く叩いた。
「お忙しいユイ様のお時間を割いていただきましたからね」
酒が入ると感情のコントロールが難しくなるから、昼間ならと答えた。
それでは、と他のプランを提案されて、ユイは嬉しかった。
素直に態度に出すには抵抗がありすぎるのだが。

電車の中に並んで立ち、思いついたようにハタノが振ってきた話題に答える。
「手話って、なんのための勉強？」
「うちの会社、医療機器販売じゃない？今度、自立支援に特化したショールームつくるの。あたし、そこに異動希望出してるから」
ん？とハタノは意外そうな顔をした。
「おまえ、なんでそっちに興味があるわけ？福祉大じゃないよな」
「なに？その限定された想像力！ちゃんと、きっかけくらいはあるんだけど」
「じゃ、そのきっかけってのは何？」

ユイは少し考えて、なるべく簡潔になるように答えた。
「大学の友達に一下肢麻痺、つまり片足が不自由な人がいたわけ。普段はあんまりハンディ感じないで付き合ってたんだけど、立ち上がるのとか階段が難儀そうでね、遠慮しないで手を貸してって言えばいいのに、言ってくれなくて」

「仲が良かったわけだ」
これには、微妙な笑みでごまかす。言わなくていい。
「それで、相手が負担にならない手の貸し方を、ユイさんは考えました。それの延長です。おしまい」
話をやや強引にぶった切る。余計なこと、言いそう。

余計なこととというのは、つまりその「友達」が男でユイの「ハジメテ」の相手だったこと。
実際、装具をはずした彼の足は、言葉をなくす程に細く頼りなかった。
悪い思い出ではなく、真面目な恋愛の話だとは思っているが、これをハタノに教える必要はない。

多分、ハタノにだって、あたしに話したことのない話はたくさんある。
たくさんあることに気がつかないほど、近くにいただけ。

「案外とお互いのこと知らないもんだな。もっとそういう話しときゃ良かった」
ハタノに笑いかけられて、言葉に詰まった。
やだ、こんなこと言われて嬉しいなんて、静まれ心臓！
あたしったら本当に、片思い中の高校生みたいになってない？

すこし無口になったユイとまだ寝不足顔のハタノは、揃って電車を降りた。

side　／ハタノ（9）

絶好のフリマ日和。
晴天が、ハタノの寝不足の目に突き刺さる。脳味噌、融けそう。
今日も休日出勤を迫られ、どうにか昨晩のうちに仕事をやっつけて帰宅したのが終電だった。
そこまでしてユイに会いたいのか、と自分に問えば答えは躊躇いながらのイエス。
待ち合わせ場所で顔を見たとき、ユイの髪の中に手を入れて掻きまぜたくなった。

代々木公園のフリーマーケットは盛況で、しかも出店者が多い。
気がつくと、隣を歩いている筈のユイの姿はなかった。
慌てて来た道を戻ると、なにやらしゃがみこんで物色している。
見下ろす角度で見ると、小さな子供みたいだ。
小さな買物を済ませたユイは、立ち上がってハタノに振り返った。
「止まるんなら、止まるって言えよ。急にいなくなってびっくりした」
「ハタノがどんどん先に行っちゃうんだもん」
「これじゃ、いつかはぐれるな」

どうしようか、と考えた後ハタノは左手をユイに差し出した。
「お手！」
「あたし、犬？」
「手ぇ引いてやるって言ってるんだ！リードじゃないだけ有難いと思え！」
自分の顔に血がのぼってくるのがわかり、殊更にぶっきらぼうになった。
でも、と戸惑うユイの右手を強引にとる。

女の子の手って、こんなに柔らかかったかな。
耳まで赤くなったユイが慌てて手を引っ込めようとするのを、更に力を入れて逃さないようにする。
中学生の初デートか、これ？
「恥ずかしいから、離して！」
「誰も知ってる顔なんかないし。おまえ、迷子になるからダメ」

手なら、何回も繋いだじゃないか。高校生の時に。
思い返して見下ろすと、ユイはまだ顔を赤くしたまま心持ち俯いて隣を歩いている。
「下向いたままじゃ、買物なんかできないだろ」
声をかけたら空いている手をバタバタと振り回した。
もう、繋いだ手を離す気はないかな。

目が会うと、恥ずかしそうな怨みがましい目が見返してきた。
こんなに可愛い顔ができるなんて、今までどこにそれを隠してたんだろう。
もしも気がつかなかっただけなんだとしたら。

俺って、やっぱり迂闊。
もったいないことしてたのに、それに気がつかなかったなんて。

side ／ユイ（10）

繋いだ手が、熱い。
ハタノが離してくれないから。
離して欲しいのか、このままでいたいのか、それはユイにもわからない。

賑やかな場所で、話す声は聞き取りにくい。
まして、売り手と買い手が大きな声で交渉しているような場所だ。
「見たいものとかあったら言えよ」
いきなり耳元に顔を寄せられ、思わず姿勢が後ろに傾くと、からかうような視線にぶつかった。
「照れてんのか？」
「誰が！ハタノに対して手ぐらいで今更照れない！」
ハタノの余裕の表情が、悔しい。

歩いていると、こちらを見上げた出店者の若い男と目があった。
「新婚さん？仲いいね、手なんか繋いじゃって。安くするから見てってよ」
新婚じゃないし！そんな関係にも至ってないし！
頭の中でジタバタするユイを見下ろして、笑いながらハタノが言う。
「安くしてくれるって言ってるけど、どうする？奥さん」
男は気安い性質らしく、軽口が続いた。
「こんな可愛い奥さん、いいねぇ。たまに貸してよ」
そう言われた次の瞬間、肩をすっぽり抱かれてユイは固まった。
「ダメだね。誰にも貸さない」
ちょっと待って！あたし、この遊び無理！ダメ！これって、拷問！
声にならない悲鳴をあげてハタノを見上げるユイを、見返す目が笑

っている。
面白がっているのが見てとれて、余計に悔しい。
あたしが動揺しまくってるの、バレてる！どうしたらいい？

「人酔いした。ちょっと休憩していい？」
そういえば、朝から疲れた顔をしていた。無理してくれたんだと思えるくらいには。

ハタノが手を握ったまま芝生に踏み出したので
「もう、混雑抜けたからはぐれないよ？手、離してもいいんじゃない？」
と、自分から見てもやけに気弱な抗議をした。
ダメ、とにべにもない返事をされて、どんな顔をしていいのかわからない。
「俺がこのままでいいと思ってるんだから、いいんだ！」
「なんでそこで俺様発言よ！ハタノのクセに！」
「じゃ、イヤか」

まともに視線が落ちてきた。目をそらすこともできない。

side　／ハタノ（10）

なるべく、しれっと普通に聞こえるように言ったつもりだ。
イヤだと言われたら手を離す気だったが、言われないと確信していた。
案の定、言葉に詰まったユイの手を離さないままに歩く。
ハタノは今日の短時間で、ここ数ヵ月中にまったく気付かなかったことに気がついた。

ユイは案外と恋愛スキルが低い。
即物的な恋愛ばっかりしてるからだ、バカ。

普段の威勢の良さとは違う困った表情が頼りなくて、つい、からかいたくなった。
面白がっているうちに、ユイの表情から目が離せなくなった。
自分の視線にコントロールが利かない。墓穴掘ったか？
出店していた男に「誰にも貸さない」と言った時には、すでにそれが本音だと自覚していた。

そうだよ、認めるよ。もう、認める。
俺はユイをまるごと抱え込みたいんだ。
もしユイが拒否するんだとすれば、それはユイ自身が決めることだ。
そして今日のユイを見る限り、俺には拒否されない自信がある。

涼しげな芝生の上に腰をおろし、ペットボトルのお茶を口に含んだ途端、眠気が襲ってきた。
そう言えば一昨日は会社に泊まりで、昨晩寝たのは朝の三時だ。
腕を枕に寝転がると冷たい芝が心地いい。
「――ごめん、限界。十分だけ寝かせて。」

なんで眠くなるかな、こんな時に。
ブラック・アウト。

白っぽい眠りの中で、優しい手に髪を梳かれた感触がある。
甘い香りがして、何やらあたたかい気配が近付いてくる。
その正体を見極めようと、ハタノは気配を引き寄せた。

side ／ユイ（11）

寝ちゃった。疲れた顔してたもの。
忙しかったって顔に書いてあるくらい、眠そうだったし。
公園で寝入っちゃうくらい疲れてたのに、出てきたんだ。
あたしに、会いに？
ユイの心臓はひとつ大きく鼓動を打った。

今日のハタノはなんだか男の人に見えて、見当が狂うと思った時、
違うよ、と自分の声が聞こえた。
男の人だったんだ。ずっと前から。

ハタノがたてる規則正しい寝息が聞こえる。
ユイが帰らずにそばについている、と確信しているように。
ユイが酔いつぶれても、ハタノは置き去りにしたことなどない。
お互い、ずいぶん無防備だ。

ハタノと手を繋いだのなんて、何年振りだったんだろう。
一緒に帰った高校生の頃に繋いでいた手とはずいぶん違う、厚い手
のひらやゴツゴツした指になった分だけ男の人になっていたのに、
気がつこうともしなかったから、ずいぶん遅くなってしまった。

絡んだ芝を落とすために、ハタノの髪を指で梳く。
気持ち良さそうな顔して寝ちゃって、子供みたい。
髪を梳きながら、高校生の頃の小鳥のついばみのようなキスを思い
出した。

手の感触が変わるように、唇の感触も変わるのだろうか。

自分の考えに、自分が驚く。
何考えてんの、あたし！
寝てるヤツの唇をどうしようって？
いや、キスしちゃおうなんて考えてない！
大体、そんな関係じゃないし！
本人の意思確認もできないのに！

でも、ハタノは熟睡中だし。
別にキスでどうこうって歳でもないし。
ハタノが知らないうちなら、自分の中だけで無かったことにできる。

あたりを見回してからハタノの頬を軽くつつき、深く眠っていることを確認して、ユイはゆっくりと顔を近付けていった。

side ／ハタノ（11）

唇が出会った瞬間に飛びのいたのは、ユイのほうだった。
「なんで？おきてた？」
半分パニックに陥っている顔だ。
目覚める前に引き寄せようとした「あたたかいもの」がユイの頭だったと気がつき、ハタノは覚醒した。
一瞬言葉を失ったが、ユイのあまりの慌てように、腹の中に笑いの泡が浮く。
「寝てるからって、何しようと思ったって？」
笑いをこらえながら、起き上がって胡坐をかく。
パニック顔のユイは、芝生の上に正座だ。

こんな時は落ち着いてるほうがイニシアチブ取れるんだよ、バカ。
おろおろしてる顔が可愛いから、教えてやる気はないけど。

だって、あの、と言葉が続かないユイに、いつもの口調で畳みかける。
「続き、しなくていいわけ？」
「続きって！」
「おまえが行おうとしてた行為の続き。」
「行為って！」
悲鳴のような声に、笑いの泡がはじけた。
喉の奥がぐうっと鳴り、たまらず吹き出す。
半ば涙目になって恨みがましく睨みつけるユイが、ますます頼りない。

笑いがおさまらないまま、ユイの肩に手をかけて引き寄せる。
「おまえ、面白すぎ。」

その姿勢を崩さないように、逆の手で頤に手をかけた。
「じゃ、続き。」
相手から仕掛けられたことに、遠慮はいらない。甘い香りがした。
肩から腕を外した時、ユイの夢見るような表情に箍が外れそうになる。
その表情をどうにかしろ！どこかにしまっとけ！

「帰るぞ。」
そっけなく声をかけ、ハタノは立ち上がった。
「え？なんで？なんか怒ってる？」
ユイのますます戸惑った声に、また笑いがこみあげてくる。
このタイミングで、なんで怒ってるなんて思えるんだよ。

まだ座り込んだままのユイに、立ったまま腰だけ折って顔を寄せた。
「ここで、押し倒しそうだから。」
悲鳴を上げそうな表情のユイを残して、出口に向かって歩き出す。
２メートルほど歩いた時に、後ろでようやく立ち上がる気配があった。

振り向いたハタノは、繋ぐための手をユイに差し出した。

ｆｉｎ.

side　／ハタノ（11）（後書き）

最後までおつきあいいただき、ありがとうございました。
とは言え、続きではない（でも、このふたりの）話が一話残っております。
それをアップの上で完結にしたいと思います。
まだ、おつきあい願えると嬉しいです。
そして、できれば感想などいただければ。

return

コトの終わったあと、パジャマを着始めたユイを見ながらハタノは切り出した。
「そろそろ、籍入れない？」
ユイの動きが一瞬止まり、ハタノを見つめる。
その後無言でまたパジャマのボタンを最後まで留め、口を開いた。
「なんで？」
「もう1年も一緒に住んでるんだし、親も知ってるし、別れるつもりもないし」
「やだ」
ばっさりと言い切ったユイは、そのまま立ち上がって冷蔵庫から缶ビールを出した。

ユイが口に運ぼうとした缶ビールをパジャマの下だけ穿いたハタノがひったくって飲む。
「なんでイヤなんだか、説明してもらおう」
「ドロボー！あたしのビール！」
ビールの缶にはマジックでユイと大きく書いてある。
「昨日、俺のビール飲んだじゃないか！」
ハタノは半分ほど一気に飲んで缶をユイに戻した。
顎で話を促され、残りのビールを飲みながらユイは話す。
「今だって、変わんないじゃない。籍入れたら、銀行やら保険やら手続きしなくちゃなんないし」
残りの一口を名残惜しそうに飲み込みながら続ける。
「ウチの会社、旧姓使う慣例がないから、顧客も混乱するし」
目出度く希望通り自立支援のショールームに配属になったばかりである。

「成り行きで一緒に住み始めちゃったけど、俺はちゃんとしときたいんだよ」
「紙一枚じゃない。のっぴきならなくなってからでいいよ」
ハタノって、なんで杓子定規なんだろう。
面倒なことなんて、後回しにすればいいじゃない。
籍入れるのなんて、子供が欲しくなってからにすればいい。
「明日仕事なんだから、もう寝る」
話をぶった切って、ユイは布団にもぐりこんだ。

「出張だから。一泊だけどね」
ハタノが出張鞄を提げて出かけて行った晩、ユイはひとりの部屋でビールを飲みながら
開放感に浸っていた。
たまには外食して、自分の好きなＤＶＤかけっ放しもいいな。
籍なんか入れたって入れなくたって、生活変わらないじゃない。
それなら「奥さん」とか呼ばれるよりも今のままがいい。

翌日の夜１０時、ハタノは帰って来ていない。
ちょっと帰り、遅くない？
いつも出張でも、こんなに遅くはならないのに。
携帯電話を呼んでも、「電源が入っていないか掛かりにくい場所に」のメッセージだ。
何かあったんだろうか。
遠くで救急車のサイレンが聞こえて、ユイはビクっと肩を震わせた。
救急車の中って、携帯ダメなんじゃない？知らないけど！
あ、１０時半。

ハタノに何かあった時、あたしの立場ってなんだろう。
たとえば手術の必要な大怪我をしたとき、同意者って親族じゃなかったっけ。

もしものことがあった時、あたしに残るのはハタノの写真数枚だけで一緒に生活した証明書なんてないんだから、記憶の中にしか何もなくなる。
お葬式の時くらいは親族席かも知れないけれど、その後ハタノに繋がるものは切れてしまうかも知れない。

――やだ、どうしよう。何にも残らないなんて、絶対やだ！
１１時。
いくらなんでも、遅い。
どうしよう、泣きそう。

玄関のドアから、ガチャガチャと鍵の音がした。
「ただいまー。疲れたー！」
ハタノが靴を脱ぎながら、出張鞄を床に投げ出した。
「携帯の電源、入れときなさいよバカ！」
「忘れてた、ごめん」
ハタノは電源を入れた瞬間に吹き出した。
「着信２０件って全部ユイ？」

背中を向けたユイに、ネクタイをほどきながら声をかける。
「心配した？連絡したほうが良かった？」
「心配なんかしてない！帰ってくるな！」
後ろ向きにクッションが飛んだ。
「とりあえず、シャワー浴びてくる。ビール出しといて」

バスルームのドアを隔て、シャワー越しにユイの声がハタノに聞こえた。
「籍、入れよう。ハタノと同じ苗字にする」

return（後書き）

最後までおつきあいいただき、ありがとうございました。
これにて完結です。

final

高校で出逢ってから、ずいぶん長いこと経った。
再会してからも、紆余曲折があった。
一緒に暮らしはじめて、籍を入れると決めるまでに1年。
籍を入れるのなら結婚式を挙げろと、双方の親からせっつかれて、更に半年。
同級生のノリはそのままで、ポンポンと威勢の良い言葉が飛び出すユイも、今日はしおらしい筈だ。

同じ部屋から式場に向かうのは、なんだか照れくさくて、ユイは両親の泊まるホテルに一緒に泊まった。
朝、目覚めたハタノは、部屋の中に自分の布団しかないことが、少し不思議だった。
ああ、俺が出張のことはあっても、ユイが留守したことはなかったんだな。
歯を磨いて髭をあたって、食パンをトーストしながら、静かだと思う。
―野菜も摂りなさいよっ！血液ドロドロになるからっ！
大丈夫です、ユイさん。一食くらいではどうもなりません。

何の節目やら。もう生活はユイと共に在り、明日からも変わるものじゃないのに、やはり何かが変わる気がする。
ウェディングドレスを選ぶのに一緒に行くことを拒まれたので、ユイの心境にも何か普段と違うものがあるのだろう。
「馬子にも衣装ってくらいだから、さぞ化けるんだろうなあ」
「黙れ、ハタノのくせに。あたしは元から美しいんだから、後光が差す」
「言葉遣い、奥様らしく改めたら？」

「奥になんか居ないもん。外様と呼んで」
結婚の話をするためにユイの実家に行った時に、子供ができたら仕事を辞めるのだろうと言われたことが、根底にあるらしい。
「娘が都会で一生懸命働いてるってのに、あの人たちは簡単にそれを辞めろとか言う」
「田舎の主婦相手に怒るなよ。あの人たちの幸せを否定することになるぞ」

野暮ったい濃紺のブレザースーツにエンジ色のネクタイ。手を繋いで帰って冷やかされた高校生時代の、あどけなさの残るユイ。
再会した後の居酒屋メインの会話と、はじめてハタノの部屋でシャワーを使った時の、恥ずかしそうな顔。
アパートの更新の時に、どうせだから一緒に住まないかと提案したら、驚いた顔したっけ。
笑うユイ、怒るユイ、泣くユイ、眠るユイ。
明日からも変わらない生活なのに、何故今日が節目になるのか。
たった数時間の儀式と紙切れ1枚で、こんな心境になるなんて。

スーツに着替えたハタノは、電車に乗って式場に向かう。
翌日から3日間は休暇だ。新婚旅行は、折を見たタイミングで行こうと思っている。
明日は1日のんびりしよう。明後日はちょっと遠出して・・・あ、お祝い返しも買いに行かなくちゃ。
実用的な考えが浮かび、今ひとつ今日の主役の実感はない。

式場の入口で、ハタノはボードを眺めた。
「秦野家・楡井家　式場ご案内」
ひどく間抜けに、あれっと思う。
ユイって、今日からユイじゃないじゃないか。
職場での苗字は変えないのだと散々聞いていたのに、自分がもう、

ユイをユイと呼んではおかしいのだと、今気がついた。
俺って、すごく迂闊。

新郎控室で着替え親族に挨拶していると、ユイの両親が顔を出した。
「もう、支度ができたのよ。見てきてやって頂戴」
導かれて新婦控室を覗くと、鏡の前に純白の後ろ姿を見た。
くるりと振り返った花嫁の顔は、今まで見た誰よりも綺麗で、言葉を失う。

「どう？カズオミくん」
いきなり名前で呼ばれて面喰い、ますます言葉が出なくなった。
両親が嬉しそうに、綺麗でしょうと念を押す。
ユイって、こんなに綺麗だっけ。
「あたしの美しさに、声も出るまい」
「うん」
「うわ、素直でキモっ！」
ユイの笑い声に、やっとペースを取り戻した。
「馬子どころじゃないや。ナナミさんに衣装」
名前で呼ぶのは、はじめてかも知れないな。今までの同級生ノリは、呼び名と共に変化するんだろうか。

祭壇の前で、ドアが開くのを待った。
バージンロードを、父親のエスコートで歩いてくる花嫁は、俯かずにハタノを見ていた。
白いドレス、白い手袋、左手に持ったブーケと同じ花が、ハタノの胸にも咲いている。
一礼して、父親の手からユイを受け取った。
今までで一番綺麗なユイ。おっと、今日からはナナミ。

式次第が終わり、腕を組んでフラワーシャワーを浴びる。

やっぱり、これは節目なんだな。
数時間の儀式と紙切れ1枚で、変化するものはあるんだ。
ユイからナナミへ変化するくらいの、小さくて大きい変化。

フラワーシャワーを抜けたユイは立ち止まり、後ろを向いたまま高くブーケを投げ上げた。

fin.

ｆｉｎａｌ（後書き）

ごめんなさい。割り込ませました。

もうしませんとか言うと、舌を抜かれる気がします。
ハタノが好き、とか言われて嬉しかったんです。
ただそれだけで、追加しました・・・
こういう人間なのだと、ご容赦を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1565o/

セカンド・コンファメイション！

2011年4月24日06時32分発行